

学習指導要領の趣旨や内容を問題の形にして全国の学校へ

活用する力を高める研究協議会

5月13日には中学校数学の、5月22日には中学校国語の、5月30日には小学校のそれぞれ中心となっておられる先生方を対象に、「活用する力を高める研究協議会」を開催しました。県内すべての小・中学校からご参加いただき、全国学力・学習状況調査から今求められる学力や、「やまぐち学習支援プログラム」の効果的な活用についての研修を行いました。

当日は、全国学力・学習状況調査の問題作成・分析に直接携わっておられる国立教育政策研究所の学力調査官から、調査問題等を例に、活用する力を高める授業についてご講話をいただきました。

ご承知のように、全国学力・学習状況調査の教科に関する問題は、学習指導要領の趣旨や内容を問題の形にして全国の学校に届けるものです。各学校において、研究協議会の参加者の復伝をもとに、調査問題等を活用した研修や授業が計画的に進められますようお願いいたします。

研究協議会の様子を少しご紹介します。

中学校数学担当
新井 仁
学力調査官



解答の正誤だけでなく、どのような間違いをしたのかをしっかりと把握すること、評価を授業改善に生かすことが大切です。

定期テストなどで、1問だけでも解答類型を整えた問題を作成し分析してみたり、単元の学習が始まる前に、定期テストの問題を検討・作成し、教科内で達成すべき目標を共有して授業を行ったりするなどの取組を進めてはどうでしょうか。

中学校国語担当
杉本 直美
学力調査官

国語科では、言語活動を通して学習指導要領に示された指導事項を指導します。生徒が明確な目的をもって主体的に学習に取り組む、思考力、判断力、表現力等の育成を図るためには、今まで以上に「単元を貫く課題解決的な活動」が重要です。

国語のB問題は、そのような授業をイメージして問題を作成しています。



小学校国語担当

樺山 敏郎

学力調査官



過去の調査結果から、「複数の情報を関係付けること、自分の立場や理由、根拠を明確にすること」が課題となっています。

国語の記述式問題で条件を与えて解答させる理由は、条件自体が指導事項であり、発問であり、評価の観点であるからです。

小学校算数担当

磯部 年晃

学力調査官



児童は「発表の機会を与えられている」と感じているのに、「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすること」について苦手意識を感じています。

つまり、機会を設けるだけでは、苦手意識は解消しないのです。それでは、どのように授業を改善していくと、この苦手意識は解消されるのでしょうか？

参加者の声

- 学力調査の問題は、ナショナルメッセージであることを忘れてはいけません。学力調査の問題は難しいという雰囲気が学校全体に漂っていたが、今回の学びを復伝し、全校教職員が一丸となって児童の課題克服のための具体的な取組を考えていきたい。
- 学力調査の問題や結果をしっかりと分析し、それをどう授業に反映させるかを考えていきたい。
- 他校の先生方との情報交換や実践発表で、具体的にどのようなことに取り組んでいけばよいかのヒントをいただいた。
- 学力調査官のお話から、解答の正誤だけでなく、誤答の傾向を分析することが大切だと感じた。それが、日々の授業改善につながる。



活用する力を高める研究協議会は、県教委の施策である「活用力向上研究事業」の一環として実施しました。今回の研究協議会を受け、秋には、授業づくり拠点校（県内7地域35校）にて、授業が公開されます。

活用する力を高めることは、本県の最大の課題です。各学校、県・市町教委、そして家庭・地域が一体となって、「オール山口」で、活用する力を高める具体的な取組を進めていきましょう。